

豊川市教育委員会 生涯学習課 発行

発掘だよりNo.33

〒442-8601 豊川市諏訪1丁目1番地

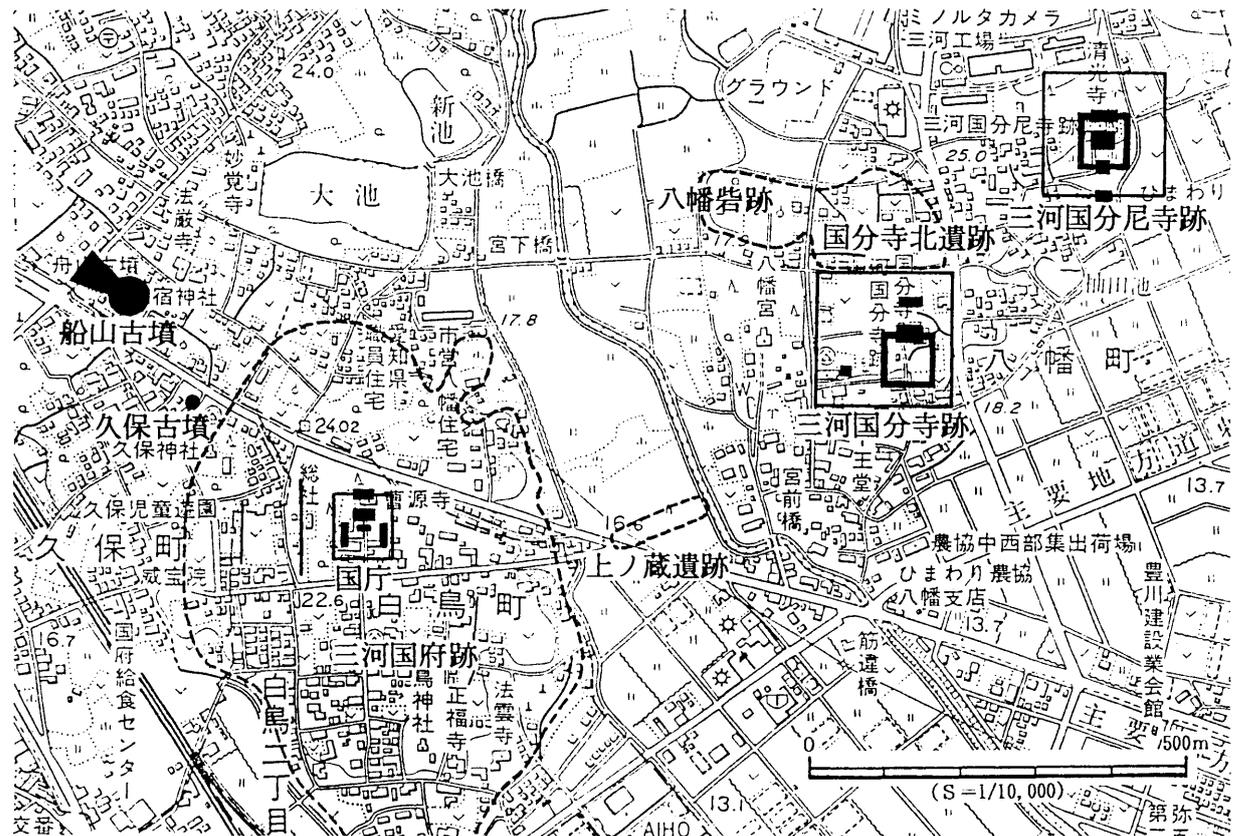
平成12年2月26日(土)

TEL 0533-89-2158(直)

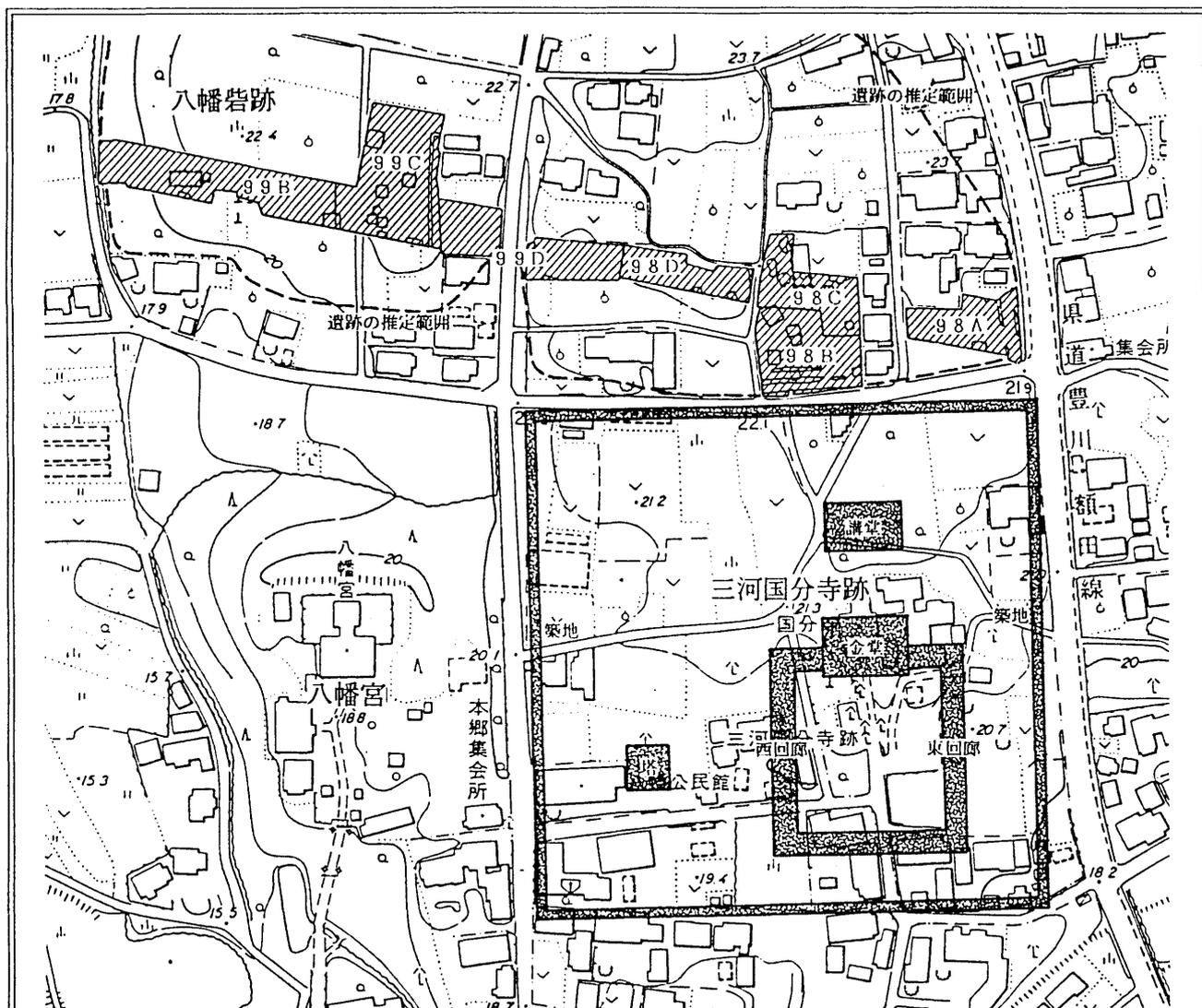
-国分寺北遺跡発掘調査の概要-

1. はじめに

国分寺北遺跡は、国指定史跡「三河国分寺跡」に北接し、立地や検出された遺構などから国分寺の経営に関連した遺跡と推定されます。また、この遺跡から戦国時代に築かれた八幡砦跡が確認されました。八幡砦跡は文献などで存在していたことは分かっていたものの、その所在が特定できなかった城です。今回の調査で、堀跡や出入口などが確認され、その概要が判明しました。市教育委員会では、この国分寺北遺跡の発掘調査を区画整理事業の施行に伴い、実施したものです。



国分寺北遺跡の周辺



調査区の位置と国分寺との関係

- ・調査主体 豊川市教育委員会
- ・調査期間 平成10年5月25日～平成10年12月10日（平成10年度）
平成11年7月9日～平成12年2月26日（平成11年度）
- ・調査面積 3,257㎡（平成10年度）、3,665㎡（平成11年度）、計6,922㎡
- ・調査契機 区画整理事業に伴う事前調査

2. 調査成果

(1) 国分寺北遺跡の調査

国分寺北遺跡は弥生時代から中世に至るまで長い間に人々が痕跡を残した複合遺跡です。発掘調査によってさまざまな遺構・遺物が確認されています。このなかで特に栄えるのは、弥生時代の墓域が展開された時期と、律令期（奈良時代～平安時代前半）の国分寺の経営に関連した時期に大きく分かれます。

【弥生時代～古墳時代初頭】

昨年度の調査区（98B・98C・98D地点）から7基の方形周溝墓が検出されました。このうち1基は四隅が切れる山中期（弥生時代後期）のもので、6基は周溝が全周する欠山期（弥生時代末葉～古墳時代初頭）のもので、周溝内からは墓に供献したと考えられる土器類が出土しています。

なお、この調査区の南側の国分寺寺域内から、過去の調査で欠山期の竪穴住居跡が数軒確認されていることから、南側に居住域、北側に墓域が展開していたものと推定されます。

【律令期】

律令期は遺構・遺物が多数確認されており、国分寺北遺跡の最も栄えた時期と言えます。2年間の調査で確認した遺構としては、竪穴住居跡25軒、大型の竪穴住居跡1軒、大型掘立柱建物跡2棟、土坑、溝などが挙げられます。

これらの遺構は、国分寺の寺域（いわゆる築地等で囲われた伽藍部分）外に広がる寺の経営地域（寺院地）を構成する施設と考えられ、かなり広範囲にわたって国分寺関連の遺構が広がっているものと推定されます。

近年各国の国分寺周辺でも調査が進み、寺に関連した遺構・遺物が多く確認されるようになり、三河国の場合もこれらの例に合致すると言えます。

【中世】

中世（鎌倉～室町時代）にも、この国分寺北遺跡の地には多くの人々が住んでおり、その痕跡が遺構・遺物として数多く確認されました。

最も多いのは、ピット（建物の柱穴など）で、その数は2000箇所を超えます。これほど多くのピットが存在するということは、それに見合うだけの建物が建っていたことを物語っておりかなりの数の人々が生活をしていたものと考えられます。

ピット以外には井戸跡、土坑墓などが検出されています。

なお、この時期には国分寺は衰退して廃寺となっていることから、国分寺には関連しない通常の集落跡と推定されます。

（2）八幡砦跡の調査

八幡砦は、戦国時代に今川方が対徳川方を意識して構築した城館で、文献によれば永禄5年（1562年）に築かれ、今川氏の滅亡とともに廃城となった短命の城だということが分かっています。城を守っていたのは板倉弾正と板倉主水という名がみえます。

今まで八幡砦跡の正確な場所が特定できていなく、国分寺の寺域内ではないかと言われてきました。

今回の調査では、八幡砦跡のものと考えられる遺構・遺物が多数確認され、調査を行ったこの場所が城跡であるということが判明したものです。

まず、確認された遺構のなかで注目されるのは、南北に掘られた堀跡とその中に築かれた土橋です。土橋の部分は城への出入口（虎口）と考えられ、その外側（東側）には馬出もしくは櫓形とも考えられるような小規模な堀が巡っています。

また、樹木を伐採したため明瞭に分かるようになったのですが、東側に土塁、北側に土塁と堀が観察できます。これらの状況から規模は東西、南北ともに約90mの方形単郭の城であると推定されます。

なお、城内からは城に関連すると考えられる掘立柱建物跡や、半地下式の建物などが検出されています。ただし、いずれも小規模なもので、主となる建物は来年度調査予定地あたりにあるのではないかと考えられます。

3. 出土遺物

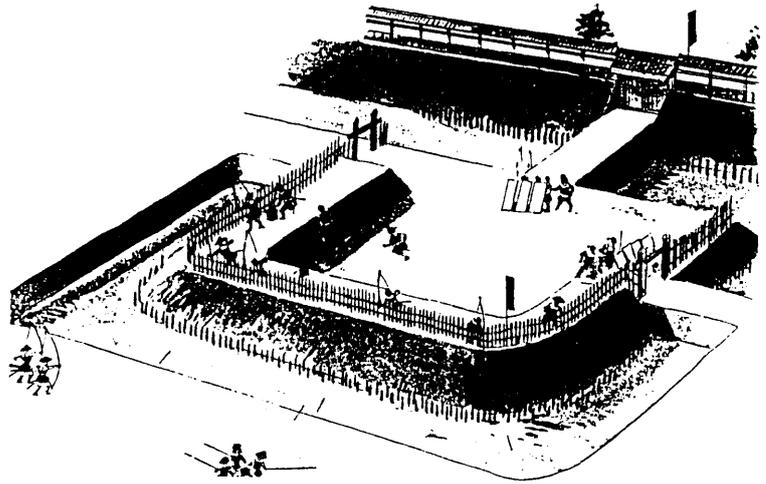
出土遺物は、2年間の調査で大量に出土しており、その数は大きめのコンテナに換算して80箱を数えます。すべてを見てもらう訳にはいきませんが、その一部を受付で展示してありますので、ご覧ください。

主なものとしては、弥生時代～古墳時代初頭の方形周溝墓から出土した壺、甕といった土器類。供献用の土器と考えられます。

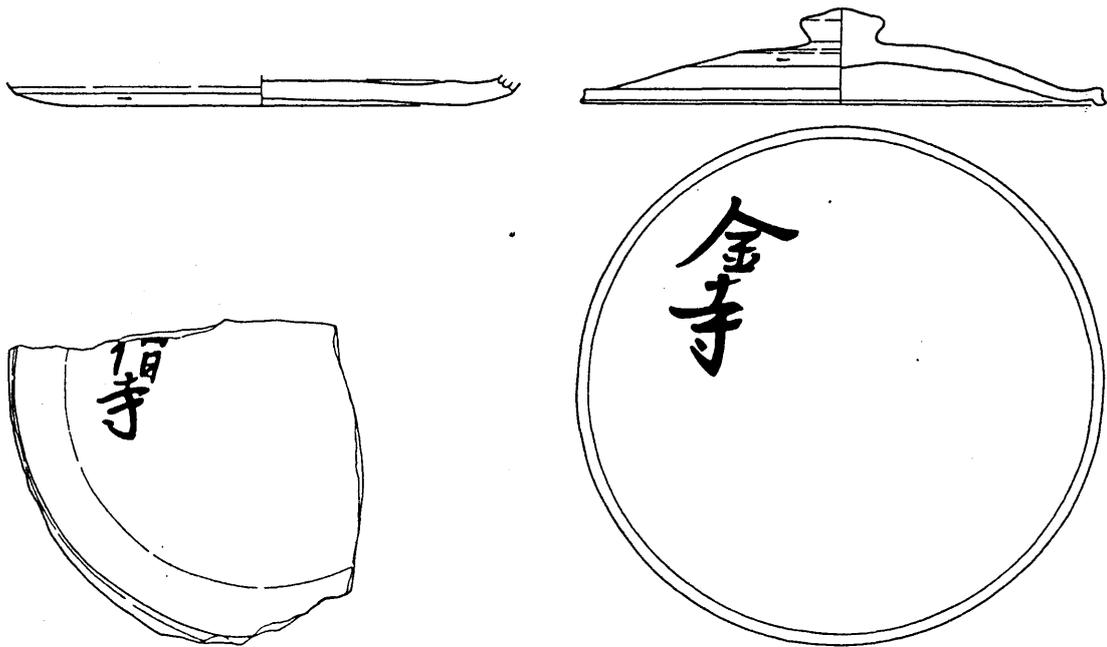
また、律令期の竪穴住居跡から出土した「僧寺」「金寺」と墨書された須恵器。この「僧寺」「金寺」は国分寺を指すものと考えられ、国分寺と密接に関連した人々の生活を物語る遺物として注目されます。

このほかには、多くの須恵器、灰釉陶器、国分寺系の瓦。中世のものとしては、土坑墓に副葬されていた、刀剣や壺類。戦国期の八幡砦に関連する多くの陶器類や鉄製品などが挙げられます。

これらの遺物は、今後整理作業を進めて、分析を行い、将来的には資料館に展示する予定です。



馬出のイメージ



出土墨書土器「僧寺」「金寺」

4. おわりに

2年間にわたる国分寺北遺跡の調査は、我々に多くのことを物語ってくれました。まず、一つ挙げられるのは、国分寺の関連施設が寺域の北側にも広いエリアで展開していることです。

国分寺を経営するためには、僧以外にも数多くの人手が必要だったことが推察され、その人たちの居住域が今回調査を行った地点で確認されたものと考えられます。また、竪穴住居跡以外では大型の掘立柱建物跡、大型の竪穴住居跡、区画溝などが検出されており、これらはまさしく、国分寺に密接に関連した施設と推定されます。今後調査が進めば、寺域外のいわゆる寺院地と呼ばれる寺の経営地域の様相がより明らかとなってくるものと考えられます。

次の大きな事柄として、今まで特定ができなかった「八幡砦跡」の位置とその概要が分かってきたことです。文献（註1）には度々登場する「八幡砦」ですが、今までその場所が判然とせず、今回の遺構・遺物の確認により、この場所であると判明したものです。この八幡砦跡についても今後調査が予定されており、より城の構造が解明されるものと思われま

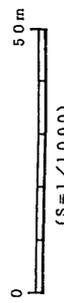
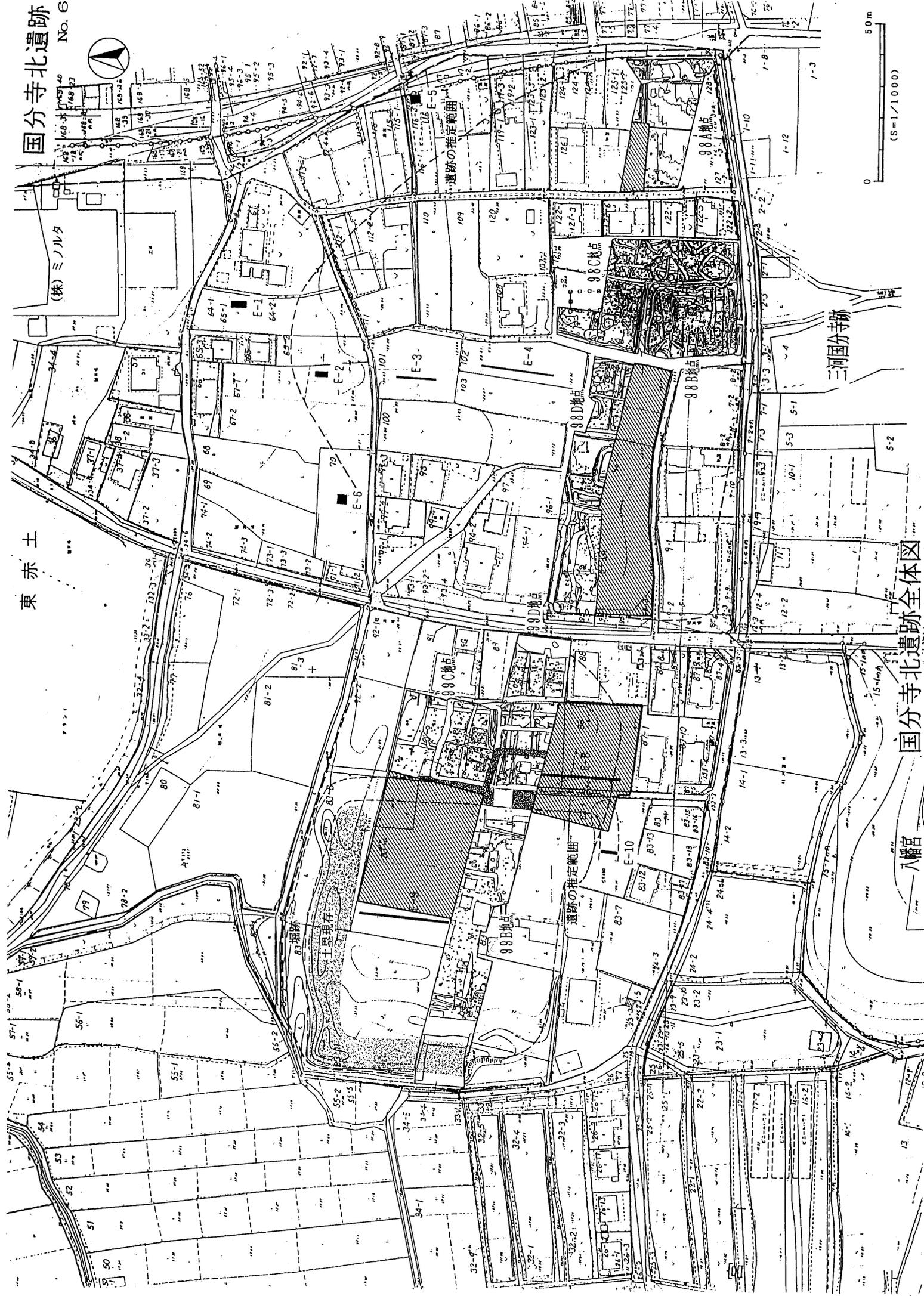
（註1）「三河物語」「松平記」「三河国二葉松」「参河国聞書」「三河国宝飯郡誌」など。

国分寺北遺跡 No. 6



東赤土

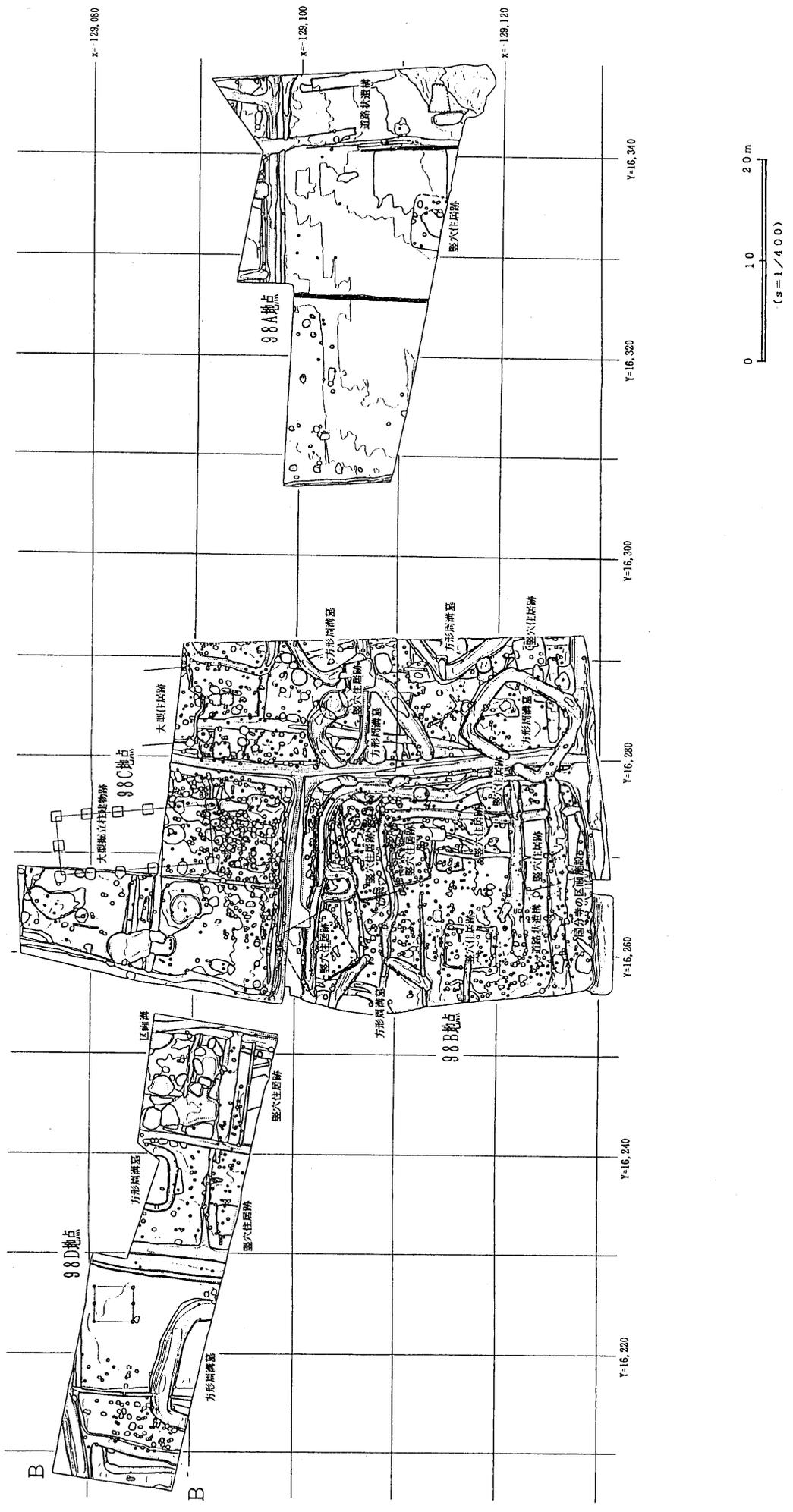
(株)ミノルタ



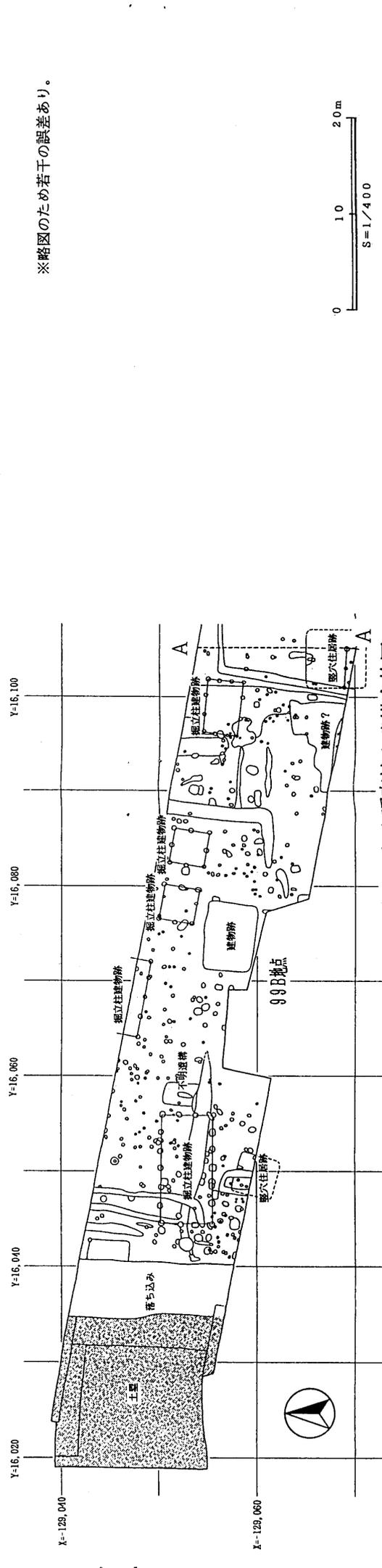
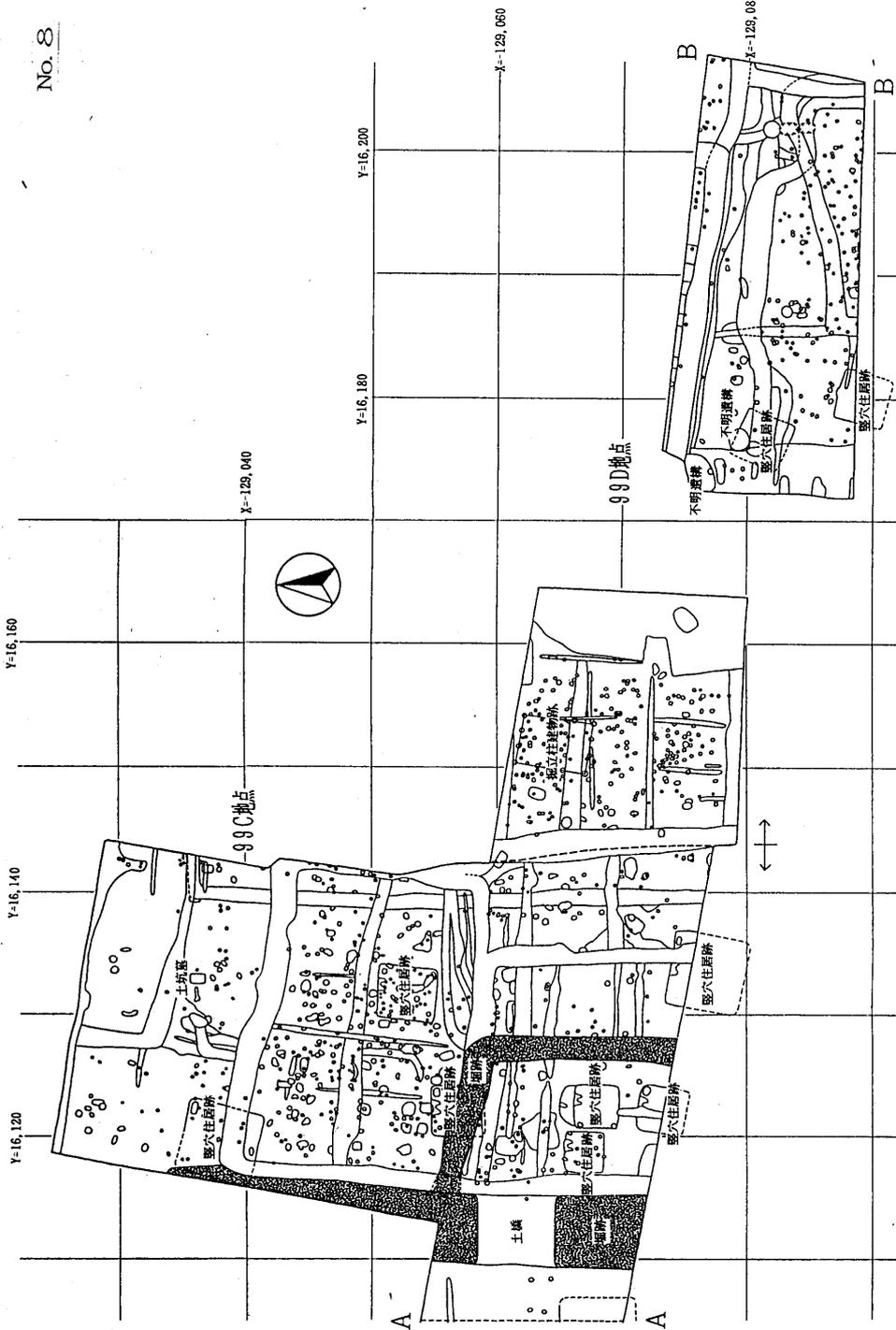
(S=1/1000)

国分寺北遺跡全体図

八幡宮



平成10年度調査地点遺構全体図



※略図のため若干の誤差あり。

